

(別紙様式3)

平成31年3月29日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 愛知県名古屋市中区三の丸3-1-2

愛知県教育委員会

代表者名 教育長 平松 直巳 印

平成30年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成30年4月2日(契約締結日)～平成31年3月29日

2 指定校名

学校名 愛知県立旭丘高等学校

学校長名 杉山 賢純

3 研究開発名

「日本再興戦略を支える若手グローバル・リーダー育成に関する研究開発」

4 研究開発概要

「国際バカロレアの趣旨を踏まえた教育の推進に関する調査研究」や県立学校アクティブチャレンジ事業で行った課題研究をもとに、批判的思考力やプレゼンテーション能力、論文作成能力などの養成を目指して、全校生徒が課題研究に取り組むための3年間を見通した教育課程を実施した。第1学年の「SG地理」を課題研究の入門と位置づけ、社会への視野の広がりを目指し、第2学年の「SG総合(思考・表現)」を通して課題研究力の向上と社会と自分との接点を見つけることを目指した。第3学年の「SG総合(探究)」では、これまでに培ってきたスキルを活かし、各自が設定した課題に対する探究活動を実践した。また、「SGH課題研究」や「ケンブリッジ大学訪問研修」等を通じて、海外フィールドワークを行う課題研究や現地の研究機関を利用した探究活動に取り組み、国際性に富むグローバル・リーダーの育成を図った。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
運営指導委員会						1						1
S G H連絡協議会		1							1			
事業視察						1						1

(2) 実績の説明

- ・研究指定校における事業を適宜視察し、課題研究をはじめ、研究開発の在り方等についての指導・助言を行った。
- ・運営指導委員会に参加し、事業の推進状況について報告を受けるとともに、研究開発についての指導・助言を行った。
- ・中間評価で指摘のあった、組織的な研究体制の構築や、国際バカロレアの趣旨を踏まえたカリキュラム開発について継続的に指導している。
- ・S G H連絡協議会において、愛知県が県内 12 地区で指定している英語教育の拠点校ハブスクールと情報交換や研究協議を行った。また、県教育委員会主催の「イングリッシュ・フォーラム」において、S G H指定校の生徒が舞台発表やポスターセッションを実施したり、学校独自の研究成果発表会において、生徒の課題発表や参加者の情報交換を行ったりする等、S G Hの研究成果の普及を図った。
- ・今年度開催した、あいちグローバル人材育成事業「イングリッシュキャンプ in あいち」に生徒 1 名が参加した。
- ・本年度、愛知県国際課が実施した、外務省の事業「カケハシ・プロジェクト」に 3 名の生徒が参加し、将来の若手グローバル・リーダーとして、日本の魅力をアメリカテキサス州の高校生等に対し発信した。

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
A I Bの趣旨を踏まえた授業 【SG 総合(思考・表現・探究)】	→											
B 英語力の強化と国際交流・国際理解	グローバル・カフェ			1			1	1	1	3		
	国際交流 LT				→						2	
a 基礎知識 【SG 地理】	→											
								講演				

C S G H 課 題 研 究	・外国人留 学生との ゼミ	準備 →	2	3	1			4	2	1	2	1	
	・研究者講 演			○									
	・国内巡検				○								
	b 海外・韓 国巡検		準備								○		
	c まとめ ・論文作成 ・成果報 告会							Un Wom en 発 表	模 擬 国 連		論文等作成		成果 発表 会
D TOP OF TOPS		準備	→		○		校 内 成 果 報 告			論文作成		成 果 發 表 会	
E 高山がローバル・サマ ー・フェスタ			準備	→		○	校 内 成 果 報 告					成 果 發 表 会	

(2) 実績の説明

A 【教育課程の開発（課題研究に取り組むためのSG科目）】

- ・平成24～26年度に行った「国際バカロレアの趣旨を踏まえた教育の推進に関する調査研究」において、TOK（Theory of Knowledge）の手法を取り入れたカリキュラムが、世界水準の批判的思考力やプレゼンテーション能力、論文作成能力などの養成に効果的であることが証明できたので、SG科目を新設し、全校生徒が課題研究に取り組むための3年間を見通した教育課程を構築した。第1学年の「SG地理」を課題研究の入門と位置づけ、社会への視野の広がりを目指し、第2学年の「SG総合（思考・表現）」を通して課題研究力の向上と社会と自分との接点を見つけることを目指した。第3学年の「SG総合（探究）」では、これまでに培ってきたスキルを活かし、各自が設定した課題に対する探究活動、さらには具体的な今後の学びにつなげる行動を目指した。
- ・第1学年普通科において学校設定科目「SG地理」を設定し、世界各国における社会的な課題（熱帯雨林消失・領土問題・少子高齢化など）に関する探究活動を実施した。この授業では、教員が年間10テーマを設定し、調べ学習・プレゼンテーション・レポート作成などの課題研究のための基礎力の養成に主眼を置いた。また、全校生徒を対象とした講演会を12月12日に実施した。（「知らない人とは関わらない？ー難民と地元民から考える人間関係ー」山崎 暢子氏（京都大院アジアアフリカ研究所））
- ・第2学年では「SG総合（思考・表現）」において、思考及び表現の技術習得を目指す学習活動を実施し、グローバル・リーダーとしての基礎的な素養の育成を目指した。具体的には、社会の仕組み、地域の課題、人々の生活をより良いものに変えるビジネスプランをグループでの協働的な活動を通して作成し、英語ポスターにして発表した。効果的に学習成果を上げるためにワークショップ式講演会を3回実施した。「ビジネスプランの作成・発表」日本政策金融公庫 国民生活事業本部名古屋創業支援センター 淵上 勇樹氏）また、活動の総括として日本政策金融公庫主催の「高校生ビ

ジネスグランプリ」に全生徒が応募し、審査の結果、「セミファイナリスト賞（上位20位）」と「学校賞」を受賞した。

- ・第3学年の「SG総合（探究）」では、これまでに獲得した知識・技能を活用した協働的な探究活動を実施した。さらなる学力向上を目指すと同時に自己評価、相互評価を通して他者理解といったグローバル・リーダーの意識や態度の育成を目指した。また、活動の成果については、グループごとにポスターにまとめるとともに、9月の全体発表会で発表した。

B【英語力の強化と国際交流・国際理解】

- ・2年生普通科のSG総合の授業内で「クラス・グローバル・カフェ」と称し、名古屋大学の外国人留学生を各クラスに4名程度招き、英語でディスカッションを行った。また、課外活動として、自主財源を活用し全校希望者の参加による「グローバル・カフェ」を年間5回企画し、外国人大学講師および留学生と自由に英会話を楽しむことで英語力の強化を図った。
- ・「国際交流LT」として第1学年全クラスを対象に名古屋国際センターの外国人講師を各ホームルームに招き、英語による講演とディスカッションなどを実施した。

C【SGH課題研究】

(a) 基礎知識の学習

- ・第1・2学年希望者のうち25名を選抜し、「共生と調和のグローバル時代を目指してーアジアから世界へー」をテーマに、ゼミ形式での授業を年間17回（選択2単位；各回100分）実施した。今年度のテーマとして、グローバル化に欠かせない女性の社会参画の問題や格差問題を取り上げ、日本と韓国が立ち後れている理由を考え、解決法を探ることとした。このうち3回は、5名の韓国からの留学生（名古屋大学など）を招いて、ディスカッション中心の授業を行った。
- ・課題に関する専門的な知識を獲得させるために全校生徒を対象とした講演会を実施した。

7月11日「外国籍の子どもたちへの支援と多文化共生」

川口 祐有子氏（NPOまなびや@KYUBAN代表）

7月13日「国際社会におけるジェンダー平等の取り組み」

「男女とも輝ける働き方」

高山 結衣氏・家田 えり子氏

（資生堂サステナビリティ戦略部・UNWomen日本事務所）

- ・国内における探究活動の一環として、7月14・15日に大阪巡検を行った。

大阪巡検＝訪問先：神戸華僑博物館・多民族共生人権教育センター

大阪人権博物館・立命館国際平和ミュージアム

講演：「在日コリアンの生活と共生への道」文 公輝氏（元大阪人権博物館学芸員）

(b) 海外でのフィールドワーク（本校生徒25人）

- ・韓国の博物館や史跡を訪問することで、日本との歴史的・文化的関わりについて理解を深めた。また、高陽国際高校の生徒とともにソウル市内のフィールドワークを行い、韓国でのグローバル化の進行状況について実地調査した。高陽国際高校の生

徒とは、両国における格差問題の状況と克服のための方策、日韓関係発展のためのプロジェクトについて英語で意見交換会を催し、互いに相手国に対してのよいイメージを構築する一方、一層の協力関係の構築が大切であることを確認した。

(c)まとめ

- ・学校祭（9月29・30日）において、韓国の文化を紹介するコーナーを設置し、本校生徒のみならず、一般来校者にも課題研究の取組を紹介した。
- ・男女間の格差の是正について、それまでの研究の中間発表として、UnWomenと資生堂の主催する「He for She ジェネレーションZからの提言」（10月20日・国連大学）において代表生徒が発表を行った。
- ・生徒のレポートや論文をまとめた論文集を作成し、3月14日に、全校生徒及び県内外の高校教員を対象とした成果発表を行った。

D【TOP OF TOPSケンブリッジ大学訪問研修】

- ・7月21日～8月5日 参加生徒12人（全校生徒対象の希望者より選抜）。ケンブリッジ大学およびケンブリッジ大学関係機関の研究室を訪問し、各自が設定した課題についてリサーチ活動などの探究学習を行った。
- ・学校祭（9月25～30日）において、本校生徒向けの発表会や分科会を行い、一般来校者にも探究活動の英語ポスター掲示や写真発表などによる成果報告を行った。
- ・愛知県教育委員会主催の「イングリッシュ・フォーラム」（12月26日）において、県内の高校生と教員を対象にプレゼンテーションとポスター発表を行った。
- ・生徒論文をまとめた成果報告書を作成し、3月14日に、全校生徒及び県内外の高校教員を対象としたに成果発表を行った。

E【高山グローバル・サマー・フェスタ】

本校が所有する林間学舎（岐阜県高山市奥飛騨温泉郷）を利用し、夏季休業中に3泊4日の日程で東海北陸地区のSGH校（第1期）が集まり、お互いをブラッシュアップさせる高山グローバル・サマー・フェスタを実施した（参加校：旭丘（13名）・名城大附属（17名）・四日市（6名）、高岡（5名））。科学技術の最先端、企業経営、環境問題、伝統芸能など各方面で活躍している方を招いてのフォーラム、大学院生などによるセミナー、外国人留学生や各校の生徒同士のディスカッション、プレゼンテーションなどを行った。

(a)フォーラムのテーマ、講師一覧

- ①「グローバルを飛騨から考える」 鎌倉投信代表取締役新井 和宏氏
株式会社飛騨の森でクマは踊る取締役松本 剛氏
- ②「世代を超えて時を刻む、コンセプトカー Setsuna」について
トヨタ自動車MS製品企画部新コンセプト企画室
グループ長辻 賢治氏
- ③1「微細藻が地球を救う」 デンソー新事業推進室事業企画担当部長渥美 欣也氏
2「香道」 香道師範萩須 昭大氏
3「人材を活かしきる！離島から世界へ」
株式会社巡の環 浅井 峰光氏（本校OB）

4 「ビジネスを自分の生活の中に取り入れよう」

株式会社アライヴ代表取締役三輪 尚士氏（本校OB）

④「リーダーシップと合意形成」

県立広島大学大学院教授 NPO法人合意形成マネジメント協会理事長百武 ひろ子氏

(b)セミナー一覧

- ①世界の社会課題を探ろう！そして解決方法を考えてみよう！
- ②What is Legal Assistance? International Cooperation in the Field of Law
- ③学校を考える/Perspective of peace in Afghanistan
- ④Protection of investment of Japanese companies in Ukraine and Special Economic Zones in Thailand
- ⑤Electronic banking and the fight against cybercrime
- ⑥What is International Understanding Education?
- ⑦Education System and school culture
- ⑧愛・逢・和 (ai・ai・ai)

7 目標の進捗状況、成果、評価

平成27年度より「グローバル意識と行動に関する調査」を在校生全員に行い、生徒の意識と行動様式に関する変容を、グローバルマインドセット、グローバルリーダーシップ能力という観点から調査した。（報告書 p. 88）

主な項目についての結果を以下に示す。

問1 いろいろな国の人たちとの交流や文化について、興味がある。

	非常に そう思う	そう思う	どちらか と言えば そう思う	どちらか と言えば そう思わ ない	そう 思わない	全くそう 思わない
平成28年	15.9%	28.0%	27.1%	13.8%	10.1%	5.1%
平成29年	21.0%	29.4%	27.9%	11.6%	6.6%	3.6%
平成30年	16.9%	33.3%	30.2%	10.0%	5.7%	2.9%

問9 外国人や自分とは異なる文化に根づく人たちの行動を正しく理解したい。

	とてもよ くあては まる	あてはま る	どちらか と言えば あてはま る	どちらか と言えば あてはま らない	あてはま らない	全くあて はまらな い
平成28年	18.8%	29.1%	33.1%	10.9%	3.5%	4.6%
平成29年	20.2%	30.3%	31.5%	11.3%	3.6%	3.1%
平成30年	21.0%	30.8%	32.2%	10.0%	5.7%	2.9%

外国や異文化に対する興味関心、意欲は年々高くなっており、様々なSGH事業を展開してきた結果ではないかと思われる。平成28年から平成29年に比べ、平成29年から平成30年は数値の伸びが小さいのは、各SGH事業は平成29年調査までにほぼ確立され、現在は成熟期に入っているためと考えられる。また、グローバルリーダーシップ能力に関わる項目については、いずれの年度においても1学年より2学年の方が自己評価が高く、スキルの向上が確

認できる。これは、「SG地理」「SG総合」を中心とした3年間を見通した学習指導の成果と言えよう。さらに、様々なSGH事業に参加した生徒の数値は、全ての項目で全校生徒を上回っている。各事業が、意識、行動様式の観点から、グローバル・リーダーの育成に有益であることが示された。年に2回実施した運営指導委員会では、それぞれの取組が高い次元で行われており、その取組が生徒の変容に現れているとの評価をいただいた。

以下に各活動の成果、評価を記述する。

A 国際バカロレアの趣旨を踏まえた授業の実現に向けて、「SG地理」、「SG総合」の中で課題研究に取り組んだ結果、批判的思考力、プレゼンテーション能力、ディスカッション能力、論文作成能力などの伸長が確認できた（報告書 p.60）。

第1学年については、普通科全生徒を対象とした学校設定科目「SG地理」で全員が10の社会的な課題をテーマにした基礎的な探究活動に取り組んだ。また、1、2年生を対象とした特別講座を12月12日に実施した。（「知らない人とは関わらない？－難民と地元民から考える人間関係－」山崎 暢子氏（京都大院アジアアフリカ研究研究所））第2学年の「SG総合（思考・表現）」においては、批判的思考力やプレゼンテーション能力・論文作成能力などを育成した。日本政策金融公庫主催の「高校生ビジネスグランプリ」に全生徒が取り組み、「学校賞」を受賞した。その中の1チームが「高校生ビジネスプラン・セミファイナリスト（ベスト20）」に選出され、東京大学伊藤国際学術研究センターで行われた表彰式に参加した。さらに、第3学年での「SG総合（探究）」において、問題解決的な活動が発展的に繰り返される探究活動と他者と協力して各自が設定した課題を解決する協働的な活動の実践を目指した。担当教諭全員が事前に「合意形成」の講座を受講し、PBL学習を通して育成を目指すべき生徒像について毎週話し合い、研鑽に努めた結果、教員も生徒も肯定的に活動を評価することができた。（報告書 p.68）

B 名古屋大学などとの連携のもと、第2学年の「SG総合」における「クラス・グローバル・カフェ」、課外活動としての「グローバル・カフェ」、LTの時間における「国際交流LT」などを実施することで、参加生徒の英語でのコミュニケーション能力を強化するとともに、学問の専門分野から文化に至るまで様々なトピックで意見交換することができた。1、2年生の普通科および美術科の生徒全員を受検対象に実施した英検IBAで、約61%の生徒の成績がCEFR換算でB1以上の結果であった。また、同様に1、2年生の希望受検者116名を対象に実施したケンブリッジ英検では、約60%の生徒の成績がCEFRでB1以上の結果であった。

C 海外でのフィールドワークを行う「SGH課題研究」では、100名以上の希望者から課題論文により選抜した25名に対し、年間を通じて外国人留学生を交えた学習会、国内における巡検、研究者による講演会などを通して、課題解決力を向上させることができた。また、韓国巡検では、現地高校生とのフィールドワークや意見交換会を実施し、若い世代の相互理解に貢献することができた。取組のまとめとして、全員分の成果報告書を作成した。（報告書 p.8）

その他の成果としてUnWomenと資生堂の主催する「He for She ジェネレーションZからの提言」（10月20日・国連大学）での中間発表、及び「SGH課題研究」ゼミ生（2

名)の全国高校模擬国連大会出場が挙げられる。

3月には生徒の自主的運営による成果発表会を実施し、参加者に向けて男女間の格差の是正、及び日韓関係充実の必要性と方策について訴え、課題研究成果を還元した。

D 「TOP OF TOPS ケンブリッジ大学訪問研修」に関しては、ケンブリッジ大学及び大学関係研究機関で探究活動を中心に積極的に研修を行った。研修の事前指導は約5か月間にわたり、海外のトップ大学での課題研究実践に向けての内容を中心に行った。各自が設定した課題テーマについて、近隣の大学の研究室を訪問するなどして調査を進めつつ、ケンブリッジの研究者へのインタビューを生徒主導で進め、リサーチクエストと各自の仮説を立てることまでを現地研修前準備とした。現地研修ではリサーチクエストに基づいて研究者から直接指導を受けることで各自の研究に対する理解を深め、さらに最先端の研究に触れることで新たな視点で課題に向き合うようにした。この個人での探究活動に加え、本校と交流のあるSt. John's Collegeを訪問し、研究室で世界トップレベルのカレッジ教育についてお話を伺った後、実際にカレッジを案内していただいた。また、現地研修中はケンブリッジ大学寮に滞在し、ケンブリッジ大学(院)生らの助言を受け、世界から集まった高校生たちとグローバルリーダーコースの講義やワークショップに参加し、世界トップレベルの大学で求められる資質を様々な学びや活動を通して体感した。現地研修後は約4か月をかけ、各自で探究活動の成果を英語によるポスターと論文にまとめ、学校内外での普及に努めた。

E 高山グローバル・サマー・フェスタでは、各方面で活躍している講師や大学院生・外国人留学生と時間をかけじっくりとディスカッションすることで、グローバルな場面で活躍するための素養を十分に育成することができ、2学期以降は学校行事などで、参加者それぞれが十分なリーダーシップを発揮した。本事業への参加校は増加しており、グローバル・リーダー育成において中部地区を代表する取組として認識されている。昨年の中部経済連合会主催「第13回中央日本交流・連携サミット～多様な人材育成～」においても、産学官が連携した「次世代リーダーの計画的育成」のモデルとして、豊田鐵郎中部経済連合会会長より報告されて以来、各企業からの協力が確かなものとなり、連携が強まった。(報告書 p.23)

8 5年間の研究開発を終えて

(1) 教育課程の研究開発の状況について

平成24年度から26年度に行った「国際バカロレアの趣旨を踏まえた教育の推進に関する調査研究」から、TOKの手法を取り入れたカリキュラムが、世界水準の批判的思考力やプレゼンテーション能力、論文作成能力などの養成に効果的であると考え、SG科目を新設することにより全校生徒が課題研究に取り組むための3年間を見通した教育課程を構築し、平成27年度から学年進行で実施した。第1学年の「SG地理」を課題研究の入門と位置づけ、社会への視野の広がりを目指し、第2学年の「SG総合(思考・表現)」を通して課題研究力の向上と社会と自分との接点を見つけることを目指した。第3学年の「SG総合(探究)」では、これまでに培ってきたスキルを活かし、各自が設定した課題に対する探究活動、さらには具体的な今後の学びにつなげる行動を目指した。

指定4年目(平成29年度)に初めて全学年がそろって「SG総合」に取り組むことにな

ったが、各学年の取組を有機的に結び付けることで、第1、2学年に実施した個々の活動が、第3学年に実を結び、最終的には問題解決的な活動が発展的に繰り返される探究活動と、他者と協力して各自が設定した課題を解決する協働的な活動の実践に至った。事前に担当教諭全員が「合意形成」の講座を受け、「目指すべき生徒像」について毎週話し合い、研鑽に努めた結果、平素の活動が円滑に進められただけでなく、生徒の課題研究の成果の発表機会であるポスターセッション（日本語・英語）や全体発表の質の向上にもつながった。教員、生徒ともに肯定的に活動を高く評価している。

（2）高大接続の状況について

京都大学と連携し、高大連携事業の一環として出前授業を実施し、課題研究の発表の一環として「京都大学ポスターセッション」に参加した。また、近隣の名古屋大学などとの連携のもと、留学生の協力を募り、第2学年の「SG総合」における「クラス・グローバル・カフェ」、課外活動としての「グローバル・カフェ」、LTの時間における「国際交流LT」などを実施し、参加生徒の国際感覚を磨くとともに、英語力、特にコミュニケーション能力の強化に努めた。

国内だけでなく海外においても、英国のケンブリッジ大学の協力を得て、「ケンブリッジ大学訪問研修」を実施した。研究室の訪問や講義の聴講に加え、各自が設定した課題について研究所でのリサーチ活動を中心に探究学習を行うとともに、大学での専門的な学問について研究者や大学生と意見交換を行った。世界最先端の研究環境を体験させることで、将来のトップレベルの研究に対する意識を高め、ケンブリッジ大学等で研究するために必要な資質・能力の育成を図った。さらに、各国から集まった高校生とともに、リーダー養成講座を受講することで、次世代を担うために必要な世界レベルの資質を育成してきた。そのような活動を重ねることにより、ケンブリッジ大学への推薦入学に向けて調整、検討を進めているところである。

（3）生徒の変容について

生徒を対象とした意識調査によると、「自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数」、「自主的に留学又は海外研修に行く生徒数」については、平成26年度から平成28年度にかけて増加し、その後は安定した数値を維持している。指定1、2年目は、参加希望者による「SGH課題ゼミ（韓国巡検）」や「高山グローバル・サマー・フェスタ」、「ケンブリッジ大学訪問研修」等の取組が本事業の中心だったため、対象者が一部の生徒に限られていたが、平成27年度から学年進行でSG科目（SG地理、SG総合）を新設したことにより、本事業が普通科全体を巻き込んだ全校的な取組となり、このような結果につながったと思われる。

「SG総合」の中で実施した、ビジネスプランの作成や生徒の探究活動については、ポスターセッションや全体発表会を通して、発表内容に質的な向上が見られるだけでなく、プレゼンテーション力や英語力など、発表に関する技術も高まっており、取組の成果が着実にあがっていると言える。

また、活動の主体である生徒からの本事業への評価は高く、本校の特色ある魅力的な取組として誇りに思う生徒が年々増えている。しかし、その一方で、現状をもの足りなく感じる生徒も少なからず存在しており、取組がさらに多方面に広がり、より質の高い発展的な内容

になることを期待する声も大きい。

(4) 教師の変容について

平成29年度から第3学年の「SG総合（探究）」を新たに開設し、普通科8クラスの生徒に対して教員16名で担当することとなった。生徒用ワークシートを共有し、事前に「目指すべき生徒像」について話し合い、研鑽に努めたことで、教員の間に共通認識が生まれ、指導を円滑に進めることができた。実施後の教員向けアンケートの中では、指導目標に関わる質問である「生徒が主体的に参加できる授業の展開になっていた」、「興味・関心を持って学習に取り組んでいるように感じられた」の2つの質問項目に関して、ほぼ全員の担当教員が肯定的に回答しており、担当教員が目標を共有し、共通理解の下に指導を行った結果が表れている。従前の「SGH事業は一部の教員による一部の生徒のためのもの」という印象が払拭され、全校的な取組としての認識が徐々に浸透してきたと感じている。

(5) 学校における他の要素の変容について（保護者等）

PTAの各種委員会や学校評議委員会等で、保護者や地域からの意見や要望を聞く機会があるが、SGH事業が進むにつれて賛同する意見や評価する意見が年々多くなり、関心の高まりを感じている。例えば、「ケンブリッジ大学訪問研修」については、保護者からの事前の間合せも多く、また学校祭における成果発表の際には、参観した保護者等は生徒の論文や発表に大変興味を示している。保護者から生徒にSGH活動への積極的な参加を促すケースも少なくないと聞いている。また、学校評議委員のSGH事業に対する期待も非常に大きく、海外研修や専門家による講演等を充実させるとともに、事業終了後の継続支援の必要性を感じている。

(6) 課題や問題点について

本校のSGH事業については、生徒の地道な努力と担当教員の手厚い指導、支援により、一定の教育効果を上げたと考えているが、本校が本事業へ申請し、導入した当初は、教職員の共通理解が十分になされず、一部の教員により、事業を進めたため、全職員の協力を得ることが容易ではなかった。また、事業を展開するにあたり、担当する分掌を新設せず、主任のみを設け、個別の委員会方式をとったことにより、それぞれの担当者への業務が偏り、組織的に支援する体制を校内に構築することができなかった。結果として、一つの活動を一部の教員が請け負うこととなり、一部の教員の負担感が増大するとともに、他の教職員の参画意識を十分に醸成することができなかった。さらに、海外研修や探究活動などの取組が個別に展開され、相互の有機的なつながりを考慮して展開することが難しかったため、「本事業を通して本校の生徒に何を学ばせるのか、どんな力を身に付けさせるのか」という共通認識に基づいた全校的な取組として機能しなかったことが大きな課題であったと考える。

また、平成24年度から実施した「国際バカロレアの趣旨を踏まえた教育の推進に関する調査研究」とSGH事業を各教科の授業改善に生かすことを目標の一つとした。例えば、SG地理や保健の授業では、生徒の主体性や協働性を重視して課題研究や発表を中心に指導を進めている。また、国語科や英語科を中心に論文作成やプレゼンテーションの指導を進めている。指導者個々のノウハウを教科全体あるいは学校全体で共有するなど組織的な活動に広げていく点が今後の課題である。

(7) 今後の持続可能性について

本事業は、本校の教育活動全体にも、地域からの支援を受ける意味からも、多大な効果をもたらしたと考えている。生徒、保護者、地域、県教委、同窓会等、多方面より高く評価されており、SGH事業を期待して本校に入学してくる生徒も少なからずいる。したがって、次年度以降についても、これまで行った取組をできる限り継続して展開していくつもりである。教育課程内の「総合的な学習の時間」においては、現行の内容に改善を加え、課題研究をより充実したものにしていきたい。また、次年度には本校が「あいちグローバルハイスクール」として県から指定される予定であり、その取組の一貫として、「ケンブリッジ大学訪問研修」、「SGH課題研究」、「高山グローバル・サマー・フェスタ」を継続実施し、その成果を本校の生徒のみならず、県内の高校生にも普及していきたいと考えている。

【担当者】

担当課	愛知県教育委員会高等学校教育課	TEL	052-954-6787
氏名	森本 芳裕	FAX	052-961-4864
職名	指導主事	e-mail	yoshihiro_morimoto@pref.aichi.lg.jp